

日本中國學會報 第七十五集
二〇二三年十月七日 發行 拔刷

吳宓と「文」の新理想

——その言語・文體觀と二〇世紀初期歐米の言語文化——

黃 詩 琦

吳宓と「文」の新理想

——その言語・文體觀と二〇世紀初期歐米の言語文化——

一六八

黃 詩 琦

一、問題としての「文體」

本文は、白話の作品を主軸とした『新青年』などの雑誌と正面から對峙した雑誌『學衡』の最も重要な編集者・寄稿者である吳宓（一八九四—一九七八）が、一九二〇—二五年の間に形成していた言語・文體觀に焦點を當てる。

一九一七年から一九一九年にかけての文言—白話論争において、胡適、陳獨秀、錢玄同らが提示した文學改良案では、古文の文法、典故の濫用、内容の空疎が激しく批判され、文言と白話は相容れないとして古文を廢止する聲が多數であった。こうした論戰の後に現れた『學衡』は、一九二二年一月に、吳宓、梅光迪（一八九〇—一九四五）、胡先驕（一八九四—一九六八）、柳詒徵（二八八〇—一九五六）らが南京で創刊し、上海の中華書局が印刷・販賣した月刊誌である（一九三三年に七十九號で廢刊）。創刊號には柳詒徵の發刊の辭があり、「籀釋の作（解説的文章）にはかならず雅なる文字を選び、もつて文を崇くし、冷靜に語つて慢罵することなく、もつて世俗を培う」という雑誌同人による文體面の宣言が記されている。この發刊の辭に「文言」使用

への直接的言及はないが、雑誌所載の論說から文苑欄の文（創作）や詩まで、『學衡』はほぼ文言のみを用い、明らかに白話を拒んでいる。こうして『學衡』と新文化主義者の論争の重要な一環として、文言と白話の論争が勃發する。

一九二二年二月、魯迅「估『學衡』」は、同誌創刊號の文體を裁きの場に引き据えた。よく知られたこの批判の典型的な一段は、以下の通りである。

「中國で社會主義を提唱することの檢討」では、「すべて理想學說の發生には、みな、その歴史上の背景あり、決して懸空の虛構にあらず。烏托之邦を造るは、無病の呻をなす者なり」と言っている。「英吉之利」のモアの本を調べてみても、Pia of Uioとはどこにも書いてはない。「之・乎・者・也」式の文語文は、止めたくても止められないのだとしても、ほかに古典から言葉をかき出すこともむずかしいことではないのに、何も好んで、眞ん中に詰りめものを加える必要があるか。昔も「睹史之陀」というのを聞いたことはないし、今も、「寧古之塔」とは言わない。かくも奇妙な文句をひねるのは、誠に「有病之呻」と言うべきだろう。

魯迅は、一九一〇年代の「文白論争」における胡適らの古文批判の核心を踏まえ、『學衡』の同人が抱える新たな問題——西洋の知識を扱う『學衡』の新しい知識人たちが、まがいものの古文に拘泥した結果、文法上の誤りや笑うべき表現が生じたことを槍玉に擧げた。新時代の若者たちにはもはや確固たる古文の素養がなく、新しい觀念を白話でなら自由に表現できるはずなのに、「復古」を企てて、「偽物の骨董品」に墮したと魯迅は批判する。

張勳の復辟事件の發生に危機感を抱き、文學革命よりも思想革命に重點をおいたこの批判は、當時の「復古」流行への魯迅の懸念を背景としていた。それと同時に、『學衡』の文體について、古文の構文や句法の完全な維持が容易でなく、外來の知識を傳えるために從來なかつた表現も作り出さざるを得ず、實態は雜種的だという重要な特徴が魯迅により明示された。一見、魯迅は文法上の誤りを例にその雜種性に反對しているようだが、根底には、古文を基盤とした新文體は傳統に縛られ、自然さや自由さが足りず、大衆には把握しがたい、だから書き言葉は話し言葉に限りなく近づくべきだという白話文の持つ民主主義のイデオロギーの影響がある。白話文は「五・四新文化」（以下、「新文化」）の重要な思想的武器として一つの潮流を形成したが、一九三〇年代以降の魯迅らの成熟した白話文は難解で、口語表現からかけ離れ、典故（古典も今典も）の多用など古文の修辭的な特徴も數多く取り入れ、文學革命の初期に求められた「言文一致」からはほど遠いものとなつた。

一九二八年、周作人は「口語を基本として、歐化語彙、古文、方言などの要素を加え、融合し調和させ、適切にあるいはちびちびとアレンジして、知識と遊び心の二重の統制がとれてこそ、趣ある俗語文が

できあがる」と、白話文に一定の知識性と洗練、そして雜種化を求め、⁴ることを唱えた。一世紀を経て白話文運動の全體像を振り返ることができる今日から見て、「新文化」以降の現代白話文は、文學革命家が宣明したような、話し言葉を如實に反映したものではなく、またそれ以前の舊白話（古白話）⁵とも本質的な違いがあることがわかつている。それは、ヨーロッパ言語の文法・語彙と日本語の文法・語彙の影響を深く受けており、新しい知識人階級が使うヨーロッパ化した白話文（歐化白話文）である。⁶一九二〇年代から三〇年代にかけて、教育部による小學校教科書に國語・白話文が採用され、白話文による「文學」の選集である『中國新文學大系』の出版などを目印として、この歐化した白話文と統一された國語は、大清帝國の「文言―官話」に代わり、國民國家としての中國の公式言語になり、國家イデオロギーを傳達する最も主要なメディアとなつた。

ある言語が國民の大多數に受け入れられるか否かは、その言語が依據する政治的・思想的權力に深く關わつていと指摘する研究者がいる。⁷文言の代わりに歐化した白話文が中國における勝利を収めた背景には、中國と西洋雙方の力の消長が潜んでいる。歐化した白話文は、西洋帝國主義が技術と軍事力によって中國に持ち込んだ新しい知識體系の副産物であり、また實證主義的精神、反傳統主義、政治的急進主義・自由主義、倫理的相對主義、社會的平等主義、個人主義などとともに、「新文化」の一部でありながら「新文化」を作り上げた唯一の言語メディアと見なされてきた。しかし、余英時が指摘したように、「新文化」をそれだけに限定せず、保守主義など多元的・多方向的な文化の矛盾體までも含めるべきだという考え方もある。⁸吳宓の文學的、思想的主張は、西洋の知識を自己の正當性の根據として援用する點で、

五四期の他の知識人と同質である。

本文は、國民國家の公用語として「文言」官話」に代わって「現代白話文」國語」が定着していく歴史的轉換期に、吳宓らが提示した對立的な言語・文體觀を對象として考察を行う。歐化至上主義に特徴付けられた「新文化」への抵抗の試みとして、吳宓をはじめとする『學衡』同人は、自國の言語的傳統とそれに繋がる過去の世界を保全しつつ西洋とコミュニケーションを取る道を選んだ。彼らの試みは西洋の思想流派の一つ、新人文主義 (New Humanism) によって正當化され、このことは「西洋」という概念が内包する多様性を表し、西洋＝帝國主義という認識を部分的に修正するものであった。

『學衡』の文體意識形成の擔い手は、吳宓が代表的である(『學衡』の一部の作者の文體が吳宓の贊同を得られていなかっことは留意すべき点である)¹⁰。そこで、『學衡』を文體から探る入口として、雑誌全體の方向性を定めた吳宓を對象に選ぶ。吳宓のアメリカ留學經驗、ことにハーバード大學英語・比較文學専攻での學習歴は、その言語・文體觀の形成に新人文主義の文脈を提供し、ニューヨークのコロンビア大學でデュレイのプラグマティズムを學んだ胡適との論争の過程で、「アメリカ文化」内部の多様性が絡みあつた對話の可能性を生み出した。

二、國語運動との戦い

歐米言語文化を武器として

吳宓の言語・文體觀を探る上で、一九二〇年十月、ハーバード大學留學中に書いた英文エッセイ「Old and New in China」¹¹が重要な手がかりとなる。吳宓は、言語、文學、教育の三つの分野において、熟慮や思考なしに西洋化への革新を行っている中國の現状がもたらす論

理的な不合理性と現實的な危険性を指摘、新しいものごとの熱狂的流行の廣がりやを批判する。中でも言語の問題は吳宓が最も重要視した点であり、力を入れて考察を行った。

このエッセイが誕生した一九二〇年は、白話文運動・新文化運動の波瀾が五四學生運動に重なつた翌年である。吳宓は一九一九年から、中國の動向に對する危惧や不満を日記に繰り返し記していた。例えば、一九一九年九月の日記には、吳宓がハーバード大學での主たる指導教員アーヴィング・バビット (Irving Babbitt 一八六五—一九三三) と、英・佛・日による分割の危機に瀕した中國を救い出す知識階級(「士大夫」)の責任について議論したことが記される¹²。三ヶ月後、吳宓は、ドイツ、フランス、イギリスなどの文學史を例に口語文學が決して目新しいものではないことを指摘したうえで、中國の國民が新しさにとらわれ、白話文學を崇拜するのは、知識不足以外の何ものでもない¹³と述べた。吳宓は、アメリカの文學運動として、綴字改革(「spelling reform」)とエイミー・ローウエル (Amy Lowell 一八七四—一九二五)の自由詩運動(「free verse」)を挙げている¹⁴。そして、「Old and New in China」を書く直前の一九二〇年四月に、吳宓は、白話文學、寫實主義、イブセンなどを妖怪變化(「牛鬼蛇神」)と呼び、中國でのこれらの流行は社會の害になること、文學の墮落であることを嘆いた¹⁵。

一九二〇年十月十五日から、吳宓は二晝夜かけて「Old and New in China」を完成し、「The Chinese Students' Monthly」(『留美學生月報』)一月號に掲載された。そのわずか二ヶ月後に、吳宓は「論新文化運動」を書き、『留美學生季報』一九二一年春季號に掲載された。この二つの文章は、中國國內の混亂に危惧を抱いた吳宓の反發とみなすことができる。中國國內と同様、アメリカでも新文化運動に對する

留學生の態度は壓制的に贊成が多数であつたため、二つの文章は紆餘曲折を経てようやく掲載され、發表後は程度の差こそあれ激しい批判を受けた。ところが、當時の中國に深い關心を抱いていたバビットは、*‘Old and New in China’* を讀んで、中國は東西の學者や人文主義者と力を合わせて時代の俗弊を變えるべきだと考え、吳宓のような中國人留學生に大きな期待を寄せた。¹⁵⁾ *‘Old and New in China’* の言語、文學、教育についての議論を通じて、一國の存續はその國の傳統と文化にかかっているという考えを伝えようとしている吳宓は、まさにバビットが考へたコスモポリタンの人文主義者の姿そのものだったのである。

さて、言語に關する吳宓の議論は、清朝末期に始まつた切音字運動とそれに續く國語統一のための提案に關わるもので、表意文字（漢字）の補足代替としての表音文字（注音字母）の使用、小學校の「國文科」から「國語科」への科目再編、教科書での白話文採用、清代の共通語「官話」に代わる新しい標準語「國語」の制定、「國語」における英語と中國語の雜種化（英語直譯型の語順で並べる歐化語法、不必要な語氣助詞の多用、三人稱女性代名詞を示す「她」などの新しい漢字、英語の標點符號の全面的採用）といった現状を批判している。吳宓の懸念は、西洋との文化融合が進む中で、漢字を用いた中國の傳統的な文字・表體體系が完全に消滅してしまうことであつた。

吳宓にとつて、文學革命派の主張で最も警戒すべき部分は、「口語／俗語」中國語の提唱と贊美にある。吳宓は、「われわれの中國語は死んでいる、ギリシヤ語やラテン語が死んでいるように（Our Chinese language is dead, like the Greek and Latin are dead）」¹⁶⁾ 文學革命派の主張に異論を唱へた。吳宓は、中國語は何千年にもわたる

中國人の膨大な文學の寶を記録した言語であり、四億人の國民が毎日（口頭でも文字でも）コミュニケーションに使っている以上、「死んでいる言語」であるはずがない、と主張する。

さらに吳宓は、文學革命から生まれた新しい傾向、即ち白話が意味する大衆の獲得と民主主義のイデオロギーに氣づいていった。文學革命派による「中國語は文語的すぎる」、「貴族の文學の缺陷を補う民衆の文學を持つべきだ」などの主張に對して、吳宓は、「どんな高度に發達した言語でも、極めて文學的な表現からスラングだらけの日常の對話まで、意味の度合いやニュアンスの違いを無限に表現できる能力を持つている」¹⁷⁾ と主張し、『聊齋志異』と『紅樓夢』を例に、兩者の文體が優雅さと日常性との兩極を包含していることを指摘する。吳宓から見ると、文學革命派の偏つた主張は、民主的共感という蠱惑の力を持ち（carry with them the glamor of democratic sympathy）、聞く者に非現實的な幻想を與える危険があつた。

‘Old and New in China’ を書いた時點の吳宓の言語觀をまとめてみると、第一に、インド・ヨーロッパ語中心主義、つまり、表音文字を基本とし、文法規則が確立しているインド・ヨーロッパ語文化が他の種類の言語文化より優れているという考え方の否定である。吳宓の言語觀は、中國の漢字とその言語體系を尊重し、支持することで貫かれていた。第二に、少數派主導の急進的言語改革への反對。言語の自然で漸進的な進化を支持する吳宓の姿勢が認められる。第三に、吳宓の言語觀には、言語の純粹さへのこだわりがある。彼は言語の雜種化現象に反對し、言語は民族の個性と生命力を表すものであり（language signifies the individuality and the very life of a nation）¹⁸⁾ 一國の言語が失われることは、民族・國家の完全な滅亡を意味すると考へている。一

九二〇年の吳宓の言語觀は、アメリカという異文化の中に身を置き、中國文化の獨自性の喪失への懸念を海外から訴える點で、言語ナショナリズムの一形態であつたと言える。

吳宓による中國語への考察でもう一つ見逃せないのは、ギリシャ語やラテン語などの古典語から英語、ドイツ語、フランス語などの現代語まで、歐米言語の例を數多く参照物として擧げている點である。吳宓は、英語の方言の複雑さと變化しやすさ、そしてヨーロッパの言語の多様さを指摘し、方言の存在が言語の普遍的現象であることを説く。中國語には文法がないという見方に對しては、ドイツ語や中世英語の文法書がかなり遅く登場したことを擧げ、どの言語でも、文法書が正式に著されるのは、その言語自體の出現よりずっと後だと指摘する。

さらに中國語のシステムは英語よりも論理的で、簡潔で、便利だと主張し、「中國の書き言葉の正書法〔漢字〕は、インド・ヨーロッパのどの言語にもない明確さと永續性を持っている。中國語の文字は、視覚と聽覺の兩方に訴えるものであり、美的感覺に優れていると同時に、意味深いものである。したがって、中國語の語源を研究することは、最も興味深いことである」と主張する。また、歴史的にも同時代的にも、英語とドイツ語は、フランス語やラテン語から多くの科學用語を借りており、語彙の構築は長い時間をかけて行われると指摘し、西洋の科學・藝術・文學用語に對應する語彙を缺いた中國語を棄てようという考えに反論した。

こうした「Old and New in China」の執筆は、吳宓自身がヨーロッパの言語に精通していることを誇示するためではなく、身に付けたヨーロッパ諸語に關する知識を利用して、白話文運動の旗手である胡適が構築した「ヨーロッパ諸國語の歴史」の誤つた物語に對抗しよう

としたものである。胡適は、「中世のヨーロッパでは、國ごとに地方の口語はあるが、文學はなかつた。學者たちは、ラテン語で學問を論じ、挨拶を交わした。當時のヨーロッパにおけるラテン語の地位は、我が國における文言の地位に相當するものであつた。最初に形成された國語はイタリア語だつた。イタリアはローマ帝國の昔の都近くだつたので、その言語もラテン語に最も近く、ラテン語の「俗語」(ウルガータ)と呼ばれていた。文學への「俗語」の取り込みは、ダントから始まつた。……こうして「俗語文學」を切り開き、その結果、イタリアの文學の國語とヨーロッパの新文學を作り上げた」^⑩、この數年、ヨーロッパ各國の國語の歴史を研究してきたが……教育部のお役人様によつて造られた國語は一つもなかつた。言語學の専門家によつて造られた國語は一つもなかつた。文學者が造つたものでないものはなかつた」^⑪などと一九一六年から一九一八年にかけて述べ、ルネサンス期にイタリア、フランス、イギリス、ドイツにおいて國語文學が形成された歴史をたどることで、文言に代わる白話を提唱するという自己の主張の正當性を證明しようとした。こうした胡適のヨーロッパ言語の知識は、もっぱらイギリスの學者エデイス・シシェル(Edith Schell 一八六二—一九一四)がルネサンスを扱つた一般向けの著作 *The Renaissance* をアメリカ留學中に讀んで得たものである。しかし、胡適による誤讀も多いことを研究者はすでに指摘する。例えば、ダント、チヨソー、マルティン・ルターなどは、自民族の言語の地位を高めただけで、胡適が主張するような「國語」を創つたわけではない。胡適は、一つの文語の成熟における無名の集團の役割を抹殺するとともに、國語と民族語の概念を混同し、統一「國語」の形成にあつて國家權力による強制的な推進があつたことを隱蔽し、少數の偉大な文學

者の功績を過大に評價しているのである。²⁰⁾

“Old and New in China”は、まさに胡適の上記の見解への反論を試みたものである。吳宓はラテン語とヨーロッパ現代語の間での語彙の繼承關係を強調し、ヨーロッパの言語が互いに混ざり合い徐々に進化してきた歴史を示すことで、一人や二人の改革者が急進的に言語を變えようとする企てに反対し、言語は大衆が使うことで自然に變容するものだとして主張した。また、吳宓は、胡適が意圖的に隠している、言語統一における國家の役割を指摘し、改革派がじつは國家と共謀關係に陥っていることを批判している。

こうした古典語と現代語の連續性を重視することは、古典文明や精神性の尊重と結びついている。それは吳宓がアメリカで受けた新人文主義の影響、バビットの他に、ハーバード大學のもう一人の師、C・H・グランジェンド (Charles Hall Grandgent 一八六二—一九三九) と緊密に關係している。

三、アメリカ新人文主義者の示唆

一九二二年から一九二五年にかけて、吳宓はグランジェントのエッセイ集 *Old and New: Sundry Papers*²¹⁾ から數篇を選択し、翻譯した。タイトルの類似からも、“Old and New in China” 執筆のもう一つの契機であったことは明らかである。グランジェントはハーバード大學のロマンス文獻學者で、俗ラテン語やダンテ研究で知られる。吳宓は在學中に、グランジェントの「フランス文學概観」(General View of French Literature) を受講し、また彼がファイ・ベータ・カップの年會で詩を朗讀するのを聞き、その内容の莊嚴さと表現の切實さを高く評價した。²²⁾ グランジェントはそのエッセイ集で、十九世紀末から二〇

世紀初頭のアメリカにおける古典教育が、モダンイズムなどの新しい潮流の影響を受けて苦境にあることを論じている。こうした彼の主張は、吳宓の言語觀の形成に大きな役割を果たした。

“Not yet the new” “School” “The Dark Ages” などのエッセイの中で、グランジェントは、なぜ十九世紀から二〇世紀にかけてアメリカにおいて古典語が次第に軽んじられたのか、という共通の命題を掲げている。それは、「近代主義者の一連のプロパガンダは、つらい自覺的努力がなくても知識は獲得できる、という誤った假定に基づいている」²³⁾。この近代主義者のプロパガンダは、高校から大學までの古典教育を冷遇し忌避するという深刻な結果を招いた。グランジェントは、教育者によるギリシャ語やラテン語教育の放棄は、人間の動物性、「怠惰」への服従であり、實用性を追求した結果でもあるとも考えた。近代主義理論の大きな危険性は、人間の生來の怠惰と一致しているところにある。教育學の悪魔たちが、ラテン語やギリシャ語や數學は難しく面白くないだけでなく、役に立たないものだ、世間に吹聴しているとき、子供たちが、あるいは親でさえ、こんな時代遅れの學習をやめて、有益で楽しいとなんとなく想像される最新の學習に置き替えるよう要求することを非難したりできようか。²⁴⁾

バビットも同様に、淺薄な近代主義は、多くの人々を古典の研究から完全に遠ざけ、古典を學ぶ人々にさえ、入門段階の困難を克服するために必要な信念と熱意を失わせる傾向があると考えた。そして、古典研究から得られる最大の利益の一つは、十年ごとに前の十年より進歩しているという本能的な確信を持ったアメリカ人による、現在への過度の傾倒と隸屬の危険から解放することである、とバビットは古典

研究の價值を説いた。⁽²⁵⁾

だからこそ、古典を現代から隔絶された存在として扱うのではなく、古典が現代と關連している多様な道筋を明らかにすることで、現代人は古典に近づけるのである。古典教師の重要な役割の一つは、ギリシヤ・ローマの世界と現代の世界との間にあるギャップを埋めることである、とバビットは言う。⁽²⁶⁾ このように、文化的エリート立場から一般大衆をほとんど無視した姿勢で、人間の動物性に存在する怠惰を蔑視し、古典を文明の最高峰、現代社會の良薬とみなす特徴は、吳宓のギリシヤ語、ラテン語、そして中國の古文に對する見方にも認められる。上記グランジェントの論述（『近代主義理論の』）を讀んだ吳宓は次のように感想を述べている。

これは、わが國で四書五經が讀まれていないことに例えられる。ただ英米人にとってギリシヤ語やラテン語はなお異國の古語である。わが國の『論語』『孟子』『大學』『中庸』は、何の難しいこととがあるうか。ギリシヤ語、ラテン語も四書五經も人類の最高の英知を集め、人たる道を人間に教えており、社會統治の基礎として文明社會はそこから離れることができない。教え方を改善すべきだというのは別の問題で、從來の教え方がよくないからという理由で古典を捨ててはいけない。⁽²⁷⁾

一九二五年、吳宓は、グランジェントの“Introduction to Dante's La Divina Commedia”を「但丁神曲通論」と題して翻譯し、ダンテの言語觀の紹介の中で、胡適のヨーロッパ言語論に對して、より明確な反論を行った。グランジェント（吳宓譯）の、ダンテの『俗語論』もラテン語で書かれたものであり、未完成ではあるが、言語の機能と流派、文學創作における現代語の有效性、イタリアの諸方言の優劣

などを扱っている。（ダンテは）イタリア各地の方言は使用に適さず、ただひとつ「理想のイタリア語」だけが、他のどの方言とも異なり、最も廣く通用しうるものであり、文學の創作に利用することができる。と結論づけた⁽²⁸⁾ という一段の直後に、吳宓は次のコメントを付け加える。

これ（理想のイタリア語を指す）は、實は現在のわが國の文言に相當し、ラテン語は篆書と隸書に相當する。今日提唱されている白話は、地方の方言に近い。ダンテの著作には雅俗の區別があり、優雅な言葉を使つて文學を創作することを主張する。實際、優雅な言葉はわが國の文言である。今、わが國で白話を推進する人たちは、必ずダンテのこの著作を先例として擧げるが、狀況が違うこと、對應關係に間違ひがあることを知らないのである。もしダンテがここにいたら、文言を共通の文章語として中國人に勧めるはずだ。⁽²⁹⁾

篆書・隸書の比喩の妥當性はともかく、グランジェント論文の紹介を通じて、吳宓は、ダンテが言語の中で雅俗を區別していること、そして優雅な言葉を文學創作の道具として選擇していることを明らかにし、胡適が排他的に白話を唱えた主張に反論していた。吳宓にとって、グランジェントとバビットというアメリカでの教育により獲得した文化資源は、ヨーロッパ古典語の文化的價值のより廣い文脈での認識と尊重という點でも、ヨーロッパ言語のより「正しい」知識という點でも、胡適に立ち向かうための武器となった。

これまでの研究者は、十九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、ドイツの文獻學（Philology）に代わつて勢いを増した言語學（Linguistics）は、言語と文字の二分法を確立し、かつ西洋の形而上學的傳統

であるロゴセントリズムの影響のもと、音聲中心のアプローチ (phonocentrism)、すなわち文字に對する音聲の優位を強調する思考様式を廣めたと指摘している。³¹⁾ この思考様式は、清朝末期、特に一八九五年の日清戦争敗戦後、漢字の難しさによる中國の低い識字率を改善するために、西洋のローマ字や日本語の假名を模倣する音聲記號を作ろうとした試みと合流し、一九一〇年代以降の中國における言語改革運動を支配している。その中、最も急進的だったのは、漢字を廢止し、ローマ字に置き換える主張である。

吳宓の言語觀の核心は、上記のような音聲中心の言語・文字觀への反發であつた。一九二二年、エッセイ「再論新文化運動—答邱昌渭君」で、中國の言語・文字體系は、紙に書く文字(書き言葉)を主とし、口に出す言語(話し言葉)を補助的なものとするこゝによつて特徴付けられると吳宓は主張する。文字には安定性があり、定着すれば全國で通用するのに對し、音聲そのものは變化しやすく、地域ごとにばらつきがあるという。吳宓は、文字よりも音聲に重きを置く白話文運動などの急進的な改革者が主張するように、これまで中國で統一されてきた標準語、すなわち「文言」と「官話」を廢止し、多様な方言や俗語を提唱すれば、甚だしい混亂を引き起こすことになると考えた。多様性と個性を伸ばそうとして書き言葉を捨て、話し言葉を優先し、地方の發音や俗語の使用を許容する「白話文運動」のやり方は、各地を統合するために國語を統一するという目的と矛盾しているだろう。しかし、一九二〇年代の白話文の實際の展開を見ると、吳宓が批判した白話文運動に存在する地方性、民衆主義、個性を推し進めようとする主張は、大きな成果を上げることなく、むしろ北京政府と手を組んで國家統一のための新しい標準語を確立する役割を擔つていたことがわ

かる。商偉が指摘するように、胡適は文言と白話の對立を強調する一方で標準語と方言の對立を隱蔽しており、彼が唱えた「白話」は眞の口語ではなく、「單に帝國內の二種類の中國語の文章語の共存を崩し、vernacularの名義で文言を白話文に置き換えただけである。」³²⁾ 結局、白話が方言の地位を保障することはできなかった。

吳宓が直面していたのは、國民國家形成の過程にある新しい中國であつた。それに付隨して、活字メディアの力によつて形成された、統制的で浸透力のある國家レベルの言語政策とも向き合わねばならなかつた。吳宓の言語觀がその時代と相容れない最大の理由は、まさにこゝに起因する。過去の大清帝國の比較的緩やかだがある程度統一された言語状態に満足していた彼は、近代における個人主義とナショナリズムの兩方の臺頭によつて生まれた、一方では個性と多様性の追求、一方では言語を含むあらゆる面における國民國家支配、その兩面に違和感を抱いていたのだ。

これは、當時形成されつつあつた國民國家としての中華民國ではなく、漢民族を中心に形成された中華民族に吳宓がアイデンティティを抱いていたことを反映している。吳宓が中國固有の言語體系にこだわつたより重要な側面は、西洋に追いつくため、あるいは西洋になるために中國は言語を改革しなければならないという理由だけで、言語と文字が持つ民族的特性を消し去つてはいけなないと考えていたことにある。國家の存續と文化の存續は一體のものであるから、言語の西洋化とは民族の特性を消滅させることでもある。

十九世紀末から二〇世紀初頭のアメリカでの言語に關する支配的な考え方は、口語を文章語より上位に置いていた。口語の柔軟性は、アメリカの進歩主義時代における變革の探求に合致していた。言語を

形成する主體は、もはや文學者にとどまらず、大衆に開かれていた。當時、死語とされていたラテン語と違い、英語は既成のものではなく、今まさに作られているものだ (the English language is not made; it is a-making now)⁽³⁴⁾とみなされる。そして、英語がラテン語に代わって世界語 (World-language) になるという考え方も廣まっていた⁽³⁵⁾。また、効率性と實用性の見地から、綴字簡易化委員会 (Simplified Spelling Board) の設立などの動きも出てきた。このような言語観は、實用主義やポピュリズムに裏付けられているだけでなく、英語を唯一の支配言語とする政策や、音聲中心主義によつて支えられていた。こうした考え方は、當時アメリカに留學していた中國人留學生にもかなりの影響を與えた。しかし、吳宓はそれとは異なる、新人文主義というアメリカの民族性にとどまらず、またアングロ・アメリカンのプロテスタントイズムに限定されるものではなく、地理的にも時間的にも、より廣範圍な西洋文明の世界、さらには東洋文明の世界も包含していた。同時に、新人文主義者たちは、文化的エリート立場から英語の低俗化に反対し、したがつて、口語を文章語より上位に置く見方にも反対した。何より、古典語を重視していたことは言うまでもない。これらはすべて、吳宓が中國語の價値を肯定し、音聲中心主義や英語至上主義から脱却するために役立つアメリカの資源である。

また、吳宓が中國語 (漢語) を中華民族 (漢民族) の存亡を左右する民族的本質と捉え、中國の言語體系への他言語體系 (句讀法も含む) 特に英語の侵入を拒み、言語の混交に抵抗を示すのとは對照的に、西洋内部の言語文化に對しては多元性を許容し、ヨーロッパ諸國の言語間の自由な混ざり合いや交流を認め、その結果としてのヨーロッパ言

語の進化と豊かさを肯定している。中國語の純粹性だけにこだわるのは、自民族の特性が喪失されるかもしれないという吳宓の思い込みや不安感によるものだろう。

四、「典雅」の創出・翻譯からの考察

以上、二〇世紀初頭における中國と歐米の言語思想の文脈の中で、吳宓の言語・文體觀を確認してきた。吳宓は、一國の言語の傳統を保存することの重要性を強調し、文言で書かれた作品を中國文化の粹とみなしている。したがつて吳宓は、胡適らの文章語に對するあまりにも口語的、通俗的な考え方は偏り過ぎであると主張し、當時國內で流行した白話文運動を激しく批判した。しかし、彼は白話文の使用を悉く拒否するのではなく、用途・機能の面で文言と白話を區別していたのだ。一九二二年、吳宓はサッカー (William Makepeace Thackeray) 『ニューカム家の人々』を白話に翻譯することに着手し、その『鈕康氏家傳』譯者注で次の二點を述べる。

翻譯の魂は妥協であると、かつてイギリスの翻譯の大家ジョウエット (Benjamin Jowett 一八一七—一八九三、筆者注) が言った。つまり、原文の意味に忠實であり、同時に目標言語の規則にも則っていないなければならないということだ。翻譯されたとは知らずに讀んでしまうような、明瞭で自然なものが良い。すなわち、嚴復のいわゆる「信、達、雅」のことである。⁽³⁶⁾

今日の人々が争つて口語體を尊び、文言を驅逐しようとすることは、どうも間違つているように思われる。それに、文言であれ、白話であれ、文をなす精神と文をなす規則を持つべきで、洗練と陶冶の工夫によつて、簡潔で明瞭な域に達していなければならな

い。概して、文言なら、まず明瞭な表現を追求し、難しい言葉の羅列を避けるべきだ。白話なら、まずむだのない洗練を追求し、冗長で低俗にならないようにすべきだ。文言と白話、それぞれに用途があり、本来は共存できる。⁽¹⁷⁾

吳宓の文體觀の形成には、翻譯實踐が極めて重要な役割を果たしている。つまり、吳宓の文體觀は、既存の中國語で西洋の思想を完璧に表現できるのか、西洋の思想や文學はどのような文體で表現されるべきかという命題への應答である（「私は何度も言うが、今日のわが國の文學において最も急務なのは、新しい文體の創造であり、西洋の思想をできるだけ既存の文字で表現することである」）。⁽¹⁸⁾ 早くも一九一五年から一九一六年にかけて書かれた吳宓の隨筆の中で、翻譯について次のような考察がなされている。

まず兩言語でよく使われる慣用句（成語）をじっくり考察し、廣く覚えて、同義のものを卽座に譯せるようにすべきである。そうすれば、どこでも適切な表現ができる。例えば、英語のある文を「險象環生」と譯せる場合、「危險は四方から發生している」と（白話で）譯し、この譯が文脈をうまく捉えていると自畫自贊してはいけない。⁽¹⁹⁾

したがって、一九一九年に吳宓がプラトンの『國家』（英語版）を文に翻譯した際には、以下のような文體を用いていた。

君子生當率獸食人之世、固不同流合汚、借眾爲惡、而亦難憑只手、挽既倒之狂瀾。自知生無裨於國、無濟於友、而率爾一死、則又輕如鴻毛、人我兩無所益。故惟淡泊寧靜、以義命自安、孤行獨往。⁽²⁰⁾

Such an one may be compared to a man who has fallen among wild beasts—he will not join in the wickedness of his

吳宓と「文」の新理想

fellows, but neither is he able singly to resist all their fierce natures, and therefore seeing that he would be of no use to the State or to his friends, and reflecting that he would have to throw away his life without doing any good either to himself or others, he holds his peace, and goes his own way.⁽²¹⁾

「率獸食人」は孟子が梁の惠王に惡政を説いた際の「庖に肥肉あり、廄に肥馬あり、民に飢色あり、野に餓孳あり、此れ獸を率いて人を食ましむるなり」に據る。「同流合汚」とは『孟子』「盡心下」で君子の反對である徳のない郷原を形容する言葉である。「挽既倒之狂瀾」の出典は韓愈の「進學解」で、學生の言葉を借りて、儒者としての韓愈自身が異端の佛・老をおしのけたことを「百川を障えて此れを束せしめ、狂瀾を既に倒れたるに廻らす」と言っている。「輕如鴻毛」と「淡泊寧靜」は、それぞれ司馬遷の「報任少卿書」⁽²²⁾と君王が持つべき徳目を論議する『淮南子』「主術訓」⁽²³⁾を出典とする。

「生當率獸食人之世」という表現は、原文の fallen among wild beasts と完全に同義ではない。「挽既倒之狂瀾」「輕如鴻毛」「以義命自安」などの表現は、原文にはなく、吳宓が譯文に手を加えたものである。譯文は原文の構文と異なり、ほとんどが四字句や對句の形に改めてリズムを生み出し、一文一文に古典の語句を盛り込んでいる。これらはすべて、吳宓が譯文を洗練させたことを反映している。

プラトンの『國家』では、ここでソクラテスとアデマントス (Ademantus of Colytus 紀元前四三二—紀元前三八二) は眞の哲人のあり方 (the worthy disciples of philosophy) を論じているが、吳宓は譯文で中國古典を豊みかけることにより、儒教經典における理想の君子像へと變

容させた。吳宓の初期の翻譯理念が、目標言語の流暢さや自然さ、目標言語の文化的文脈により重きを置いていたとすれば、吳宓の『國家』譯は、彼の初期の翻譯理念の最も典型的な例と言える。

しかし、一九二二年に吳宓が『ニューカム家の人々』を翻譯した際には、目標言語の流暢さ（「達」）を保つた上で原文の忠實（「信」）にも力を入れた（「この譯文は原文の言葉の意味に忠實であることを求め、絶対に必要でない限り一字も加えたり引いたりしない」）。『ニューカム家の人々』の譯文において、吳宓は、中國文學に馴染んだ表現（「且說」「虬髯公」）を少数しか使わず、英語の俗語を中國の詩型の七言詩に譯すことだけで目標言語に近づく目的を果たそうと企てる。これは當然、吳宓が白話をその目標言語としていることと關係している。譯文の言語的基盤である白話は、英語の文法や語順の影響を受け、より原文に近いものとなっている。

且說小紐康之父走上來與我握手，我不禁滿面通紅。原來我心中正在作滑稽文章，用他比某戲裡一個角色，又替他起個虬髯公的外號。Newcome's father came up and held out his hand to me. I dare say I blushed, for I had been comparing him to the admirable Harley in the Critic, and had christened him Don Perolo Whiskerandos.⁽⁴⁷⁾

末後輪到紐康太尉身上，那小鬼唱道：眼前一位老軍官，似從印度剛生還。旁坐小兒笑合肩，最好回家床上眠。

And when, coming to the Colonel himself, he burst out—"A military gent I see—And while his face I scan, I think you'll all agree with me—He came from Hindostan. And by his side sits laughing free—A youth with curly head, I think you'll all

agree with me—That he was best in bed. Ritolderol," etc.

一九二二年までに、吳宓は文言と白話の両方に挑戦し、いずれも上品に書けるように追求した。これは何よりも、翻譯對象の選擇と關係がある。

プラトンの『國家』は、言うまでもなく吳宓のいう西洋學術の精華である（「ギリシア三哲の書を讀まずに西洋學術を扱うのは、四書五經を讀まずに儒學を崇め、内典を讀まずに佛學を崇めるようなものである」⁽⁴⁸⁾）。プラトンの著作は西洋の學問の精髓であり、それ自體が非常に模範的であるため、より優雅な文體に譯すのは理にかなっている。さらに、吳宓はプラトンの思想を儒學と同列に論じるため、儒教經典に登場する典故を選んで譯す方針を採っている。

そして、吳宓が『ニューカム家の人々』を譯した動機は、當時中國で起きていたデイケンズの小説の翻譯ブームへの不満である。吳宓によると、デイケンズの小説は『水滸傳』のように、役者や奴隸、暴れん坊を中心に書かれ、その文體は奔放で、過剰に描かれ歪曲されており、大衆に好まれる傾向がある。一方、サッカーの作品は、『紅樓夢』のように、貴族や才子佳人を描いたものが多い。文體もより繊細で、適切に描寫され眞摯なもので、知識階級に人氣がある。上流階級の人物描寫に長け、品格のある優雅な文體で書かれているサッカーの小説の譯文に、吳宓は當然、優雅な白話を選択し（「譯筆當摹仿《紅樓夢》體裁」⁽⁴⁹⁾）、人名・地名・出來事を詳細に考證・注釋して、翻譯の忠實性に則った。

ハーバード大學の英語・比較文學専攻で受けた吳宓の文學教育は、ヨーロッパ諸國の文學の史的展開が中心であった。しかし、バビットを始めとする吳宓の師たちは古代ギリシャ・ローマや西洋古典主義の

擁護者である。そのため、吳宓にとつての「文學」とは、まず、限られた識字階層によつて掌握され、何世代にもわたつて磨かれてきた成熟と優雅さという特徴を持つ書き言葉の全體であり、さらに、アメリカで受けた十七〜十九世紀の西洋古典主義の文學觀念でもある。この場合の「文學」は、西洋古典主義美學の特徴である、崇高で優雅な規範にも従わなければならないのであつた。

終わりに

本誌はわかりやすく、むだなく書くことを心がけている。あえて言葉飾り立てたり、古い漢字を多用して、平氣でペダンティックになることはしない。特に、あえて奇抜さを標榜したり、獨創性を鼻にかけたりはしない。總じて、我が國の文字言語で西洋から來た思想を表すことを目指す……適切に使うことができれば、我が國の文字言語は常に意味を伝えることができる。定まつている文法を作り變えて、美しいことばの形式を破壊する必要はない。⁽³⁾

『學衡』の「雜誌簡章」にこう記されたように、吳宓をはじめとする『學衡』同人は過去の中國の書き言葉を踏まえて革新を企てようとした。彼らが理想的な文體に求めるものは、平易かつ上品な言葉によつて、西洋傳來の知識を讀者に伝える能力である。彼らが稱揚する文體の「典雅」とは、章炳麟のような古典的に過ぎる難解な漢字の使用を意味しないし、先秦・漢代に定められ後の時代にほぼ踏襲された文言の文法・構文・語彙と完全に等しくもない。文言の文法的・構文的規則とそれに基づく風格・美學から距離を置くからには、文言と白話における雅俗の區別ははたしてどこに認められるのか。それはおそら

く、象徴としての文人という身分、あるいは知識や品性において一般大衆に秀でるべきだという文人の自己に對する高い要求であろう。アメリカにおける古典教育と新人文主義の影響を受けた吳宓は、こうした文人のアイデンティティを中國を含む全世界の知識人へと擴大し、東西古典文明という廣い視野の下で「典雅」の意味を理解したのである。

實際、清末期にはすでに、宣教師の白話翻譯や方言小説の隆盛など、「文言」官話の支配を瓦解する力が蓄積されており、新たな「文言」の創出を想像する素地となつていたので。吳宓はこうした清代末期の新たな文化的勢力の流れをも繼承している。それは、文言「官話」を完全に放棄して「白話」「國語」だけに新たな言語的正統性と中心性を再確立しようとした新文化主義者とは異なる道を拓こうとする態度であつたと言える。

謝辭…原稿を注意深くお読み頂きの確な意見を頂いた三人の匿名査讀者に深く感謝する。また論文の作成にあたつては平田昌司先生から助言をいただいた。

注

(1) 弁言…繙譯之作必趨雅音以崇文，平心而言不事嫚罵以培俗。(『學衡』第一號、一九二二年一月)。

(2) 「中國提倡社會主義之商榷」中說、「凡理想學說之發生。皆有其歷史上之背影。決非懸空虛構。造烏托之邦。作無病之呻者也。」查「英吉之利」的摩耳，并未做 Pra of Uto，雖曰之乎者也，欲罷不能，但別尋古典，也非難事，又何必當中加榷呢。于古未聞「嗜史之陀」，在今不云「寧古之

- 塔」, 奇句如此, 真可謂「有病之呻」了。(魯迅(風聲)「估『學衡』」『晨報副刊』, 一九二二年二月九日。後に『熱風』(北新書局一九二五年)に収録。『魯迅全集』第一卷(學習研究社, 一九八四年, 四五九-四六五頁)の伊藤虎丸氏による日本語譯を引用した)。
- (3) 宋聲泉「論周作人的白話轉向與文言翻譯」(『周氏兄弟研究』第一號, 二〇一三年三月, 二一七-二三三頁)。
- (4) 以口語爲基本, 再加上歐化語, 古文, 方言等分子, 雜糅調和, 適宜地或吝嗇地安排起來, 有知識與趣味的兩重的統制, 纔可以造出有雅致的俗語文來。(周作人(豈明)『燕知草』跋『新中華報副刊』, 一九二八年第一冊, 四〇-四二頁)。
- (5) 「歐化白話文」は、清朝末期の宣教師が中國人の助手と協力して聖書などのキリスト教文學を白話文で翻譯したことにまで遡り、これに對して西洋の影響を受けていない白話を「古白話」と呼ぶ研究者がいる。袁進「重新審視歐化白話文的起源——試論近代西方傳教士對中國文學的影響」(『文學評論』, 二〇〇七年第一期)を參照。
- (6) 瞿秋白「鬼門關以外的戰爭」(一九三二年五月三十日、『亂彈及其他』, 震社一九三八年)。陽翰笙(寒生)「文藝大衆化與大衆文藝」(『北斗』第二卷三・四期合刊, 一九三二年七月)。
- (7) 姚達兌『現代的先聲: 晚清漢語基督敎文學』, 中山大學出版社二〇一八年。
- (8) 注(7)前掲書。
- (9) Yü, Ying-shih. 2001. "Neither Renaissance nor Enlightenment: A Historian's Reflection on the May Fourth Movement." In *The Appropriation of Cultural Capital: China's May Fourth Project*, edited by Milena D'Velingerová and Oldřich Král, 299-324. Cambridge and London: Harvard University Asia Center.
- (10) 『學衡』同人の邵祖平が書いた古文・詩・詞に吳宓が不滿を持っていたことは晩年の『吳宓自編年譜』(生活・讀書・新知三聯書店, 一九九五年, 二二六頁)から窺える。
- (11) *The Chinese Students' Monthly*, 16:3 (January 1921). *The Chinese Students' Monthly Online*, Leiden and Boston: Brill, 2014によらぬ。
- (12) 『吳宓日記』第二冊, 生活・讀書・新知三聯書店, 一九九八年。一九一九年九月二十三日(七十七頁)。
- (13) 一月二四日(一〇五頁)。注(12)前掲書。
- (14) 四月六日(一四八頁)。また, 一九一九年八月二日(五九頁)、『一月七日(九〇頁)』, 一九一九年一月二日(九二頁)、『一九二〇年一月二日(二二九頁)』などにも白話文學への批判が述べられている。注(12)前掲書。
- (15) 一九二二年一月一七日〜二月一日(二二二-二二三頁)。注(12)前掲書。
- (16) ...any highly developed language can be and has actually been used to express infinite degrees and shades of meaning—from the extremely literary diction to the vulgar conversation full of slangs. 注(11)前掲記事, pp.201-202.
- (17) The orthography of our written language has a quality of definiteness and permanence hardly matched by any Indo-European languages; and every Chinese word has a double appeal—to the eye and to the ear; it is highly aesthetic as well as meaningful. (Hence most interesting is the study of our etymology.) 注(11)前掲記事, p.202.
- (18) 中古之歐洲, 各國皆有其土語, 而無有文學。學者著述通問, 皆用拉丁。拉丁之在當日, 猶文言之在吾國也。國語之首發生者, 爲意大利文。意大利

- 者、羅馬之舊識、故其語亦最近拉丁、謂之拉丁之“俗語”(Vulgate)。“俗語”之入文學、自但丁(Dante)始。……從此開“俗語文學”之先、亦從此為意大利造文學的國語、亦從此為歐洲造新文學。『胡適日記全集』第二冊、聯經出版事業、二〇〇四年、五二七頁(一九一七年六月十九日)。
- (19) 我這幾年來研究歐洲各國國語的歷史……沒有一種是教育部的老爺們造成的。沒有一種是語言學專家造成的。沒有一種不是文學家造成的。(胡適「建設的文學革命論」『新青年』第四卷第四期、一九一八年)。
- (20) 胡適が構築した「ヨーロッパ諸國語の歴史」が讀者を誤つて導いた可能性については、程巍「胡適版的“歐洲各國國語史”：作為旁證的偽證」『北京第二外國語學院學報』二〇〇九年第六期、八一—二〇頁)を參照。
- (21) Grandgent, Charles Hall. 1920. *Old and New: Sundry Papers*. Cambridge: Harvard University Press.
- (22) 一九一九年九月二十三日(七十六頁)‘一九二〇年六月二十一日(六九頁)。注(12)前掲書。
- (23) The whole Modernist propaganda is based on the false assumption that knowledge can be acquired without painfully conscious effort. “Not yet the new”, 注(21)前掲書 p.18.
- (24) The great danger of the Modernistic theory lies in its coincidence with the innate laziness of man. When pedagogical Satans are proclaiming from the house-tops that Latin and Greek and mathematics are not only hard and uninteresting, but useless, how can children, or even parents, be blamed for demanding that these outworn studies be abolished and replaced by brand new ones vaguely imagined as both profitable and entertaining? “Not yet the new”, 注(21)前掲書, p.19.
- (25) Babbitt, Irving. 1908. *Literature and The American College*, p.166. New York: Houghton Mifflin Company.
- (26) 注(25)前掲書, p.167.
- (27) 按此可與吾國之不讀四書五經等比較、惟希臘拉丁對英美之人尙為異國之古文、若吾國之論孟學庸等、有何艱深之可言乎?希臘拉丁與四書五經皆人類最高智慧之所集凝、皆教人以爲人之道、為羣治之本而文明社會不可須臾離也。教授法之宜改良爲一事、不可因噎而廢食也。これは、“not yet the new”を中國語に翻譯したとき吳宓が付け加えた案語である。吳宓「陳訓慈譯「葛蘭堅論新」『學衡』第六號、一九二二年六月。
- (28) Dante Alighieri. 1909. *La Divina Commedia: Inferno*, edited by C. H. Grandgent. Lexington: D.C. Heath & Company.
- (29) 「通俗文字篇」亦以拉丁文作成、未完、論文字之功用及派別、今世文字可否用以創製文學、意大利各種方言之優劣等。而斷以意大利各地之方言悉不合用、惟一種理想之意大利文、異乎各種方言而最能通行者、則可以用以創製文學……(吳宓譯「但丁神曲通論」『學衡』第四十一號、一九二五年五月、十五頁)。グランジエントの原文は Another Latin treatise, the uncompleted *De Vulgari Eloquentia*, gives us his opinions on language in general, the use of the modern idiom as a literary medium, the relative merits of the various Italian dialects, and the principles of poetic composition in the vulgar tongue; he believed that an ideal, universal Italian, different from any of the actually spoken dialects, was fit, not only for amatory verse, but for martial and moral themes as well. 注(28)前掲書, p.xx. 吳宓が「俗語による詩作の原則」の部分の譯を意圖的に省略したことに注意。
- (30) 按此實相當於吾國今日之文言、拉丁文則相當於篆隸等文。今人所倡之白話、近乎一地之方言。但丁書中有雅言、俗言之分、而主以雅言創作文字、其實雅言即吾國之文言也。近今吾國提倡白話者、每舉但丁此篇以為

先例，不知其間情勢不同，比附有誤。使但丁而在，必主張中國人以文言爲通用之文字也。

- (31) Zhong, Yurou. 2019. *Chinese Grammatology: Script Revolution and Literary Modernity, 1916-1958*. New York City: Columbia University Press. 王東傑『聲入心通：國語運動與現代中國』（北京師範大學出版社二〇一九年）などを参照。
- (32) 吾國文字，以文 written language 之寫於紙上者爲主，以語 spoken language 之出於口中者爲輔。（吳宓）「再論新文化運動——答邱昌渭君」『留美學生季報』一九二二年第四號）。
- (33) 商偉「言文分離與現代民族國家：『白話文』的歷史誤會及其意義」『讀書』二〇一六年十一月。Shang, Wei. 2002. "Bahua, Guanhua, Fangyan and the May Fourth Reading of Rulin waishi." *Sino-Platonic Papers*, no. 117 (May): 1-10.
- (34) Matthews, Brander. 1909. "The speech of the people." *The American of the Future and other essays*. New York: C. Scribner's Sons.
- (35) "English as a World-language." "Simplified Spelling and 'Fonetic Reform.'" なぞ Brander Matthews のエッセイを参照（注（34）前掲書）。
- (36) 昔英國翻譯大家 Jowett 嘗言……「The soul of translation is compromise. 蓋謂既須密合原文之意，又須遵此國文字之定例。明暢自然，使人讀之不知其由翻譯來者。亦即嚴又陵所謂信達雅是也。（吳宓）『鈕康氏家傳』譯者謹識『學衡』第八號一九二二年八月）。
- (37) 時人競尚語體而欲剷除文言。未免有誤。且無論文言白話，皆必有其文心文律，皆必出以凝練陶冶之工夫而致於簡潔明通之域。大凡文言，首須求其明顯，以避艱澀餽餽。白話，則首須求其雅潔，以免冗沓粗鄙。文言，
- 白話，各有其用，分野殊途，本可並存。注（36）前掲記事。
- (38) 吾屢言，今日吾國文學界最急要之事，即爲創造一新文體，強以固有之文字，表西來之思想。注（36）前掲記事。
- (39) 宜先將甲乙兩國文中通用之成語，考記精博，隨時取其意之同者，而替代之，則處處圓轉確當。例如英文某句，適可譯爲「險象環生」者，決不可譯爲「危險由各方面發生」，而自詡其文理之近似也。吳宓「餘生隨筆」『吳宓詩話』，商務印書館二〇〇五年，二十三頁。
- (40) 一九一九年九月八日（六十六頁）。注（12）前掲書。
- (41) 吳宓の日記や「西洋文學精要書物」（『學衡』第七號）によると、底本は B. Jowett の英譯 *The Republic of Plato, translated into English with Introduction, Analysis, Marginal Analysis, and Index* (Paris) ことが推測である。版本は不明。
- (42) 庖有肥肉，廄有肥馬，民有飢色，野有餓殍，此率獸而食人也。『孟子』「梁惠王上」。
- (43) 同乎流俗，合乎污世。『孟子』「盡心下」。
- (44) 障百川而東之，回狂瀾於既倒。韓愈「進學解」。
- (45) 人固有一死，或重於泰山，或輕於鴻毛，用之所趣異也。『文選』「報任少卿書」。
- (46) 是故非淡薄無以明德，非寧靜無以致遠，非寬大無以兼覆。『淮南子』「主術訓」。
- (47) 此譯稿首求密合原文之詞義，非大不得已，決不增損一字。注（36）前掲記事。
- (48) アイルランド出身の劇作家のリチャード・B・シェリダンが作った劇作のこと。
- (49) *The Critic* の登場人物である。
- (50) 治西學而不讀希臘三哲之書，猶之宗儒學而不讀四書五經，崇佛學而不

闕内典。一九一九年九月五日（六十二頁）。注（12）前掲書。

（51）一九一九年八月三十一日（五十八頁）。注（12）前掲書。

（52）バビットとグランジェントの他に、J・L・ローウェス（John Livingston Lowes 一八七〇—一九四五）も自由詩運動を批判し、古典詩を擁護した。

（53）本雜誌行文，則力求明暢雅潔。既不敢堆積餽釘，古字連篇，甘爲學究。尤不敢故尙奇詭，妄矜創造。總期以吾國文字，表西來之思想……苟能連用得宜，則吾國文字，自可適時達意，固無須更張其一定之文法，摧殘其優美之形質也。「雜誌簡章・體裁及辦法」（『學衡』第一號、一九二二年一月）。